

Working for Minneapolis Heart Institute Foundation II

ミネアポリス心臓研究財団留学記 II

根本 尚彦

東邦大学医学部内科学講座循環器内科学分野 (大橋)



題名にIIとつけたのは、7年前に当科の先輩である原英彦先生が「世界の研究室から」を書いているからである。さて、優秀な前任者とは異なり、平均的東邦医学生よりはるかに英語のできない私が「留学に行こう」とある程度本気で考えたのは、医師になって7年目が経過したときである(前任者は学生の頃から)。それまでは、漠然と「留学」、いい響きだなーとは、思っていたが、あまり現実的な計画ではなかった。当時、運よく(運悪く?)東邦大学大橋病院第3内科医局(現東邦大学医療センター大橋病院循環器内科)からは同時に4人もの先輩が留学していたし、留学を勧めてくれた出張先の部長先生や研修医の時指導してくださった先生も留学していたことから、比較的留学が特別なものではなかった(あとで、とんでもない勘違いだったと思い知るのだが)。

現在私は、ミネソタ州のミネアポリスにいます。州都セントポールは、ミシシッピー川を挟んでおり、ツインシティーと呼ばれている(メジャーリーグのツインズの名の由来)。日本では、あまりなじみのない都市ですが、4大スポーツがすべてあり(アイスホッケーは、アメリカ最強)、教育、税金、治安面から、また春夏秋と景色が大変美しいことから、2011年アメリカでもっとも住みやすい都市に選ばれた。そしてデルタ航空のハブ空港としてアメリカ全土に直行で行くことができる。しかし、何よりも有名なのは冬の寒さである。緯度が樺太と同じであり零下20度以下になる。

私はこの5月で、当地のミネアポリス心臓研究財団で研究を始めて約10カ月が経過することとなった。ミネアポリス心臓研究財団は、アボットノースウエスタン病院に併設されている機関である。私には、研究が売れるというのがイマイチ理解できていないのだが、6階のフロアひとつで、去年純利益1億5000万円もあげている。



Schwartz 先生. CT 読影室にて. 背がものすごく高い. はじめは威圧感を感じたが、大変親切で紳士的である。



Maron 先生. 心筋症の大家で Maron 分類を作成した人. 隣の部屋で仕事をしており英語の勉強は進んだかと声をかけてくれる。

私のアメリカでのボス、Schwartz先生は、循環器疾患を広い範囲網羅し多くの分野において多数の論文を書いている。非常に多忙な方だが、いやな顔せず週に最低1回、多い時は週3回、私とのミーティングのため時間を割いてくれる。ミネアポリス心臓財団内で、部下を忙しくするので有名ようだが（施設内でよくジョークで使われている）、優れた人格と洞察力、知識から醸し出されるオーラがあり、大変楽しく、ミーティングが終わったあとは、いつもやる気に満ち溢れる（半分も理解できてないのだが）。私の研究生活は、月曜朝7時のカンファレンスから始まり週のうち4日間は、CT (MRI) 室、火、水のどちらかは、エコー室かカテーテル室で主に弁膜症疾患治療を学んでいる。まだ10カ月程度だが、英語ができない私でも新たな

環境で新たな分野を勉強することにより、非常に充実した忙しい日々を送らせてもらっている。また、生活することにより旅行や学会で来る時とは、異なる面が見えていろいろ考えさせられることも多い。この文章が「英語はできないが留学してみたい」と考えている人の参考になれば幸いである。

最後に私の留学を快く許可して下さった大橋病院循環器内科 杉 薫教授と同心臓カテーテルセンター 中村正人教授ならびに暖かく見送って下さった大橋病院循環器内科スタッフ一同およびいつもお世話になっている医局秘書の須藤さんに心よりお礼申し上げます。また今回の留学について直接Schwartz先生をご紹介して下さった、大橋病院循環器内科 原 英彦先生に感謝致します。